奨励賞

葉っぱの神様

下牧町　西川喜代美

「つまんない」

薫はベッドに大の字になってつぶやいた。

父さんと母さんは土曜日も仕事で出かけたし、お兄ちゃんは部活、おばあちゃんはさっき夕飯の買い物に出かけてしまった。

昨日まで三日間も学校を休んだんだから、友達の家にも遊びに行けない。

「あんたはすぐ熱ぶり返すんやから。今日と明日、休みの間は大人しく寝とってよ」

母さんに朝出かけにそう念を押された。

「もう！　限界」

薫は起き上がると、窓を開けた。

海からの風にカーテンが大きく膨らむ。

「あぁ気持ちいい！」

薫の部屋からは正面に住吉神社が見える。その少し右手には灯台があり、その先はもちろん海だ。左手には住吉橋があり、その橋を渡れば学校はすぐそこだ。

梯川の河口に面した二階のこの部屋が薫の部屋だ。同じ兄妹でも、お兄ちゃんは波の音が気になって眠れないと言って廊下を挟んだ反対側の部屋にいる。

「うん？」

窓から見下ろした堤防の上に誰かが横たわっている。片手をだらんと下げたまま、全く動かない。

「大丈夫なのかな？」

それと、あそこは私のお気に入りの場所なんだけどなぁ。母さんは「女の子がお行儀悪い」なんて怒るけど、ホワンとあったかいコンクリートの堤防の上でするお昼寝はメチャ気持ちがいい。

いつもなら魚釣りに来た人が通ったり自動車だってたまには通る。それなのに今日に限って誰も通らない。

寝ているのは大人ではなく、五年生の薫と同じくらいの男子みたいだ。

「誰だろ？」

近所の子なら学年が違っても大体見当がつく。

「あっ！」
堤防まで声が届くとは思えないのに、自分の声に驚いて思わず口を両手で抑えた。
ツヨシだ。
ツヨシは一か月ほど前に転校してきたクラスメイトだ。
転校してきた日、か細い声で何とか自己紹介をしたツヨシ。先生が黒板に書いた佐藤強という名前は休み時間には「佐藤弱」に書き換えられていた。
転校してきた友達と仲良くなりたいという気持ちの裏返しかもしれないが、男子たちのやり方はちょっと幼稚すぎると薫は思った。
そんな感じのまま一か月が過ぎ、この町で標準語を話す大人しいツヨシはクラスの中で浮いたままだった。
それにしても動かない。大丈夫なんだろうか。気分でも悪くなったんだろうか。横に停めてある自転車で転んでケガでもしたんじゃないか。
薫の空想は悪い方へとどんどん転がり落ちていく。
「いいよね。すぐそこだし、出かけたうちには入らないよね」
薫はひとりでつぶやきながら下に降りると玄関から外をのぞいてみた。
「遊びに行くんじゃないもんね」
さらに言い訳しつつ堤防へと近づいた。
やっぱりツヨシだ。こんなに近づいても気が付かないなんて寝ているんだろうか。息はしてるよね。
薫はそっと近づいて耳をすます。
大丈夫だ。でもここで何してるんだろう。

授業中、先生にあてられると、小さな声でぼそぼそ答えているツヨシに向って「聞こえませーん」なんて女子にもいじられている。
その度私は心の中でエールを送っている。
「カンバレ、ツヨシ！」
実際には届かない声だけど、ツヨシのことを声援する回数がやたら多いのは、おばあちゃんから聞いた話のせいかもしれない。
ツヨシは今までお母さんと二人、東京で暮らしていた。でもお母さんが病気になって、こっちで入院することになったので、おばあちゃん家に引っ越してきたらしい。
うちのおばあちゃんが町内の老人会で聞いて来た話だ。
ツヨシのお母さんはまだ入院中なのかな。
「……さま」
目を閉じたままツヨシが何かつぶやいた。
「えっ？　かみさま」
薫が顔を近づけたのとツヨシが起き上がったのと同時だった。
「わっ！　何だよ」
薫があわてて後ろにのけ反ったので何とかぶつからずに済んだ。
「もう！　急に起きんといてよ！」
口をとがらせている薫にツヨシが大きな声で言い返す。
「何でオマエが怒るんだよ！　勝手にのぞいてたのはそっちだろ！」
ツヨシも大きな声が出るんだ。そう思ったら自然とほほがゆるんで笑顔になった。
「何、笑ってるんだよ」

「あっ、違うって。ごめん」
あわてて謝ったけれど、ツヨシはプイと横を向いてしまった。
つい緩んでしまう口元を引締めて薫は話を続けた。
「二階から見とったら全然動かんし、大丈夫かなって心配になったんやもん」
「二階？」
「うん、あそこ」
薫はカーテンがヨットの帆みたいにふくらんでいる二階の窓を指さした。
「私の部屋」
ツヨシが振り返って見上げているすきに薫は堤防によじ登ってツヨシのとなりに腰かけた。
「まあ、ツヨシが無事で良かった」
何で？　ツヨシって呼び捨てなんだ。
ツヨシがそう思ったと同時に、薫が右手を差し出した。
「私、カオル、中野薫。ツヨシもカオルって呼んでいいよ」
どうしていいか分からず、薫の右手から目をそらせて、ツヨシは海の方をながめた。
差し出した右手はそのまま宙ぶらりんで仕方なく薫は手を引っ込めた。
「クラスのみんなの名前とか覚えた？」
黙って首を振ったツヨシは、そのまま堤防を下りると自転車にまたがった。
「もしかして神社に行く？」
「えっ、何で？」
「だって、さっき神さまってつぶやいとったから。お母さんの病気のことお願いしに行くんかなぁって」
ツヨシは眉間にしわをよせると、そのまま自転車のペダルに足をかけた。
「あっ、待って」
薫の声を無視してツヨシがペダルを踏み込んだ瞬間、薫は堤防から飛び降りて自転車の前に両手を開いて立ちふさがった。
「ちょっと、待ってって！」
薫の大きな声にびっくりしてツヨシは自転車のブレーキをかけた。
「危ないだろ！」
「待ってって言うとるのに、ツヨシが無視するからやろ！」
このままツヨシが行ってしまったら、ちゃんと気持ちを伝えられない。誤解されたままなのは嫌だった。
「オマエには関係ないだろ！」
「ないかもしれん！　でも、本当に心配しとるし、お母さんのこと、早く元気になるといいなって思っとる。信じてもらえんでも、本当やから」
ツヨシの自転車のハンドルを薫も両手で握りしめていた。
「友達、なんやから心配して当たり前やろ」
「ともだち？」
ゆっくりうなずいた薫がハンドルからそっと手を放して言った。
「お母さんのこと、いきなり言うてごめん。無神経やし嫌な奴やって思ったよね。本当にごめん」
ツヨシがゆっくり首を振る。
「もういいよ」

薫は顔を上げることができなかった。
ツヨシは自転車から降りると、ちょっと恥ずかしそうに右手を差し出した。
「えっ」
びっくりした顔で見返す薫にツヨシはちょっと恥ずかしそうに小さな声で言った。
「友達なんだよね。よろしく」
さすがに、すぐにはカオルなんて呼べなかった。
「うん！　こっちこそ」
ツヨシの右手を薫は両手でつかんで思いっきり上下に振った。
「い、痛い、痛いって」
「あぁ、ごめん」
あわてて手を放した薫にツヨシが言った。
「神社、行くつもりだったんだけど」
「つもりだったって？」
不思議な顔で首をかしげている薫にツヨシが答える。
「ううん、もういいんだ。神社行ってくる」
「あっ、私も一緒に行っていい？」
「いいけど」
「ちょっと待っとって」
家の方へ走って行った薫は一度家に入るとすぐに出て来て車庫に入ったかと思うと、今度は自転車に乗ってツヨシの前をそのまま通り過ぎた。
「お先ぃー」
「えっ？」
ツヨシも慌てて自転車で追いかけた。薫の自転車は勢いよく住吉橋を渡り神社の方へと曲って見えなくなった。
追いついた頃には、薫は自転車を駐車場の隅っこの松の木の側に停めて待っていた。
「遅いなぁ」
「カ、カオルがフェイントかけてさっさと走り出したからだろ」
「へへっ。だね、お参りしよ」
薫は鳥居のところで丁寧にお辞儀をすると石段を一段ずつ踏みしめるように上がりながらツヨシにたずねた。
「神社って好き？」
「好きって……」
好きも嫌いも考えたことなんてなかった。
考え込んでいるツヨシから答えなんて聞くつもりなんてないのか、薫はうれしそうに言った。
「私は好きやなぁ」
そして両脇を固める狛犬の辺りで立ち止まると薫は独り言のようにつぶやいた。
「やっぱり、おらんなぁ」
「おらんって、何が？」
振向いた薫が、真剣な顔つきでツヨシに聞いた。
「笑わん？」
「何を？」
「何でもいいから、絶対笑わんて約束して」
「う、うん」
ツヨシがうなずくと、薫がゆっくりと言葉を区切るように話し出した。
「わたし、神さま、見たんや」

「えっ、かみさま？」
薫が両手のひらを合わせてツヨシの目の前に差し出した。
「こんな小さい、神様？」
ツヨシは薫の手のひらをまじまじと見つめた。
「楽しそうな顔しとったよ」
「楽しそうな……何で？」
「だって、自分のお祭りの日やもん」
「お祭りって九月の？」
ツヨシも何度かその時期に合わせて、おばあちゃんの家に来たことがある。大きな獅子舞や花火のことも憶えている。
「違うって。この神様のお祭りは七月や。そん時、あそこの灯篭のとこにおったんよ」
薫の指さした先には、しめ縄が巻かれたご神木と、そのそばに灯篭が一つあった。
「そ、そうなんだ」
「信じられんよね？　まっ、仕方ないけど」
薫はあきらめてさっさと歩き出した。
「先、お参りしよう」
お稲荷さんの赤い鳥居のところまで来ると薫は慣れた手つきでポケットから小さな財布を取り出して、さい銭箱にポンと投げ入れジャランジャランと鈴を鳴らした。二度頭を下げパンパンと手をたたくと、とても丁寧にお辞儀をした。
「ほら、ツヨシもお参りしなさい」
ツヨシはちょっとムッとした。
前の学校でもそうだったけど、女子ってどうしてこうもお姉さんみたいな口のききかたをするんだろう。
お社の中の凛とした一対のキツネが何をつまらないことをと笑っている気がしてツヨシは急いでお参りをすませた。
「ねえねえ、あの子たちかわいくない？」
薫が指さしたのはお稲荷さんのお社の外でちんまりと鎮座している二匹の狛犬だった。二匹はあの大きな狛犬に比べたら子犬のようなサイズで顔もユニークで迫力のかけらもなかった。
「この子たち土の中から発見されたんやよ」
「へぇ」
何回か来ているのに、ツヨシはこの狛犬たちの存在に初めて気が付いた。
「そんでね、おんなじ子たちがあっちにもいるんや。ちょっと来て」
薫は本堂の前に立つとさっきと同じように丁寧にお参りを済ませ、ちょっと遠慮気味に奥の方を指さしサッと手を引っ込めた。
ちょっと背伸びするようにのぞくと、奥の方の祭壇の両脇にも、確かに同じような二匹が向き合って座っている。
「ほんとだ」
「そんでね、こっちこっち」
今度は本堂を左手に曲り小さな鳥居をくぐり金毘羅さんにお参りした。
「ほら」
薫が指さしたお社の中にも、同じ小さな狛犬たちが鎮座していた。
満足そうに「ねっ」と薫が笑った。
「いろんな事、知ってるけど、調べるの？」
「ううん。私、そういうの苦手。わからん事はすぐに聞く。ちっ

こい狛犬は巫女さんから教えてもらった」
「じゃあ、その小さな神様のことも、もう誰かに聞いた？」
「まさかぁ。その話したんはツヨシが初めてだよ。私、小さな神様みたんですけど、なんて聞けんよ。頭、大丈夫？　って言われたらどうするん」
「えっ、じゃあ何で？　何で僕には話したの」
「うーん、ツヨシはちゃんと聞いてくれるって思ったから。信用できるって、私の直観！　当たった。笑わんとちゃんと聞いてくれたもんね」
「うん」
薫がうれしそうに石段をトントンと下りていく。石段の一番下まで降りた薫はツヨシが下りるのを待ってから神社を見上げてもう一度深くお辞儀をした。
「ツヨシと一緒にここにお参りに来たかった理由がもう一つあるんや」
そう言うと、手招きをしてから薫が石段の隅っこに座った。
ツヨシはちょっと迷ってから少し離れて腰をかけた。
薫はさっきの財布から、小さくたたんだ紙を取り出した。何度も開いたりたたんだりしているのか紙の端々は曲がって破れそうになっていた。その紙を宝の地図でも見せるようにゆっくりと開いてツヨシに見せた。
「図書館で見つけたんや」
本をコピーしたその紙には、葉っぱの上に勇ましそうな男の子が描かれていて、上の方に少名昆古那尊と書いてあった。
「スクナビコナノミコト。小さいけど立派な神様なんやよ」
葉っぱの上に寝ころんだ一寸法師のような少年は何故かうれしそうな顔をしている。
「小さい神様って葉っぱの神様なの？」
ツヨシの質問に薫がちょっと考えてから首を振る。
「葉っぱかなぁ。ここにも書いてあるやろ？　イヤクの神様」
確かに説明文に「医薬」と書いてあった。
「お薬とか、昔はいろんな葉っぱから探して煎じたかもしれんし。なるほどね。葉っぱの神様かぁ」
薫は一人でうんうんと納得すると自信満々につけ足した。
「だから、ツヨシのお母さんの病気もちゃんと治してくれる。私も今日しっかりお願いしといたから」
「僕のために」
「うん。ツヨシとお母さんのために」
「あ、ありがと」
だけどツヨシは浮かない顔のままだった。
「何か、迷惑やった？」
薫は心配になってツヨシにたずねた。
「違うんだ」
ツヨシは相変わらず下を向いている。
「どうしたん？　何でも言うてよ。友達やろ」
「う、うん」
フウッと一つ息を吐いてからツヨシが話し始めた。
「願掛けって知ってる？」
「知っとるよ」
「前の学校に、哲也って友達がいて、サッカーの試合で優勝できるまでゲーム我慢しますって願掛けしたら、本当に優勝できたんだ」

「良かったね。そんで」
「だから、僕も願掛けしたんだ」
「何て？」
薫がのぞき込むようにツヨシの顔を見る。
「僕は、母さんのお見舞いに行くのを我慢します。だから母さんの病気を治して下さいって」
ツヨシが最後まで言い終わらないうちに薫が怒鳴った。
「何それ！　バッカじゃないの！　ずっと行ってないわけ？」
「うん。だって自分の一番好きなこと我慢したら願いが叶うって」
「ほんと、男子って幼稚なんやから！　相手の気持って考えんの？　お母さん会いたいに決まっとるやろ！」
怒って立ち上がった薫が上から見下ろしてにらんでいる。
薫から目をそらせてツヨシがつぶやく。
「願掛け取り消せるかな」
「そもそも、そんな変な願掛け、神様かって無視やわ」
そう言い切ると、薫はもう一度鳥居の正面に立ち神社を見上げて手を合わせた。
「だいじょうぶ。お母さん元気になるよ」
「うん」
「ツヨシも、もう一度ちゃんとお願いして」
薫の横に並んでツヨシも手を合わせて心の中でお願いした。
「神様、あの願掛けは取り消して下さい。母さんの病気を治して下さい。それと、母さんのお見舞いにもすぐに行きます。あと、薫って友達が出来たことに感謝します」
目を開けると薫がにっこり笑いかけた。
それだけで心臓がドキドキと早く動き出しツヨシは慌てて薫から目をそらせた。
「何か、変やよ。どうしたん？」
「な、何でもないって」
薫から逃げるように自転車のところまで歩きかけた時だった。
ポツン、ポツン……
「あっ、雨」
後ろから来た薫がポーッと突ったっているツヨシの手を引っ張り、自転車が停めてある松の木の下まで走った。
その途端、
ザーッ！
音を立てて大粒の雨が降り出した。木の下のわずかな空間は二人だけで満杯だった。
「ひゃあ！　すんごーい！」
横に並んでいる薫は何だかうれしそうだ。
身体がくっ付くほど近い。ツヨシは居心地が悪くてポソッとつぶやいた。
「あぁ、早く帰れば良かった。ついてない」
不思議そうに「何で？」と聞いた薫にツヨシは答えた。
「何でって、普通そう思うんじゃない。濡れないうちに帰れば良かったって」
「ふーん、私、フツーって言葉嫌い。ツヨシってつまんない」
つまんないって何なんだよ。
ツヨシの不機嫌な顔なんて気にも留めずに薫は楽しそうに空を見上げている。
「あっ、見て。ほら！」

薫が駐車場の反対側にある大きな木を指さした。
「きれい！」
風にあおられた黄色い葉っぱがいっせいに散り始める。まだ雨は降っているのに、何故かその木の回りだけ陽が射し始めている。
太陽の光を受けて、濡れている小さな葉っぱたちがきらきらと舞い散る様子は、そこだけがスポットライトを浴びた舞台のようで、とても素敵だった。
「雨宿りして良いことあったやろ？」
「うん。明日、お見舞い行ってくるよ」
ツヨシは意地をはらずに素直に言うことが出来た。
「私も一緒に行こうか」
「あっ、だめ！　いや、また今度」
慌てて答えたツヨシだったけれど顔が自然とほころんだ。
母さんに「薫って友達ができたんだ」って報告したらきっと男子だって思うだろうな。
風にあおられ松の木から水滴が落ちた。
「きゃ、冷たい！」
二人同時に空を見上げた時、誰かがクスクスッと笑った。
「いま、聞こえたよね？」
薫の問いにツヨシが無言でうなずいた。
薫が大きな声で空に向かって呼びかけた。
「葉っぱのかみさまぁ。ツヨシのお母さんのこと、お願いしまーす！」
ツヨシは、もう元気になった母さんの顔しか思い浮かばなかった。
さっと吹き抜けた風とともに、またクスクスッと笑い声が聞こえた気がした。